

# 使役表現における音韻の混乱について

中 野 琴 代

1. はじめに
2. 使役表現——問題点の所在——
3. 使役表現——活用の形態とその意味
  - 3-1. 助動詞の活用
  - 3-2. 他動詞の活用とその意味
4. 使役表現——音韻の混乱, 及びその原因
5. 結論

## 1. はじめに

現代日本語の中には、きちんとした日本語として認められ、許容されている表現と、いわゆる卑俗な表現とされ、実際に頻繁に使用されているにもかかわらず、許容されにくいものが存在する。可能形「食べれる、見れる」等のいわゆる「ラ抜き言葉」は後者の部類であり、これを正式な日本語として認めるか否かは、未だ決着のついていない問題である。この「ラ抜き言葉」ほど社会的に意識されていないが、日常の会話の中で、使役表現についてもユレが存在することに気づいている人は少なくないであろう。

使役表現は、日本語教育の中では「せる、させる」を基本とする。しかしながら実際には、「行かせて」と「行かして」、「見せて」と「見して」、「笑わせないで」と「笑わさないで」など、一つの状況、行為を表現するのに複数の形態が見られ、特にテ形の「(さ)せて」と「(さ)して」の両形は日常の会話の中ではその勢力は拮抗していると言ってもよいほどである。昨今、相手の了承、承諾を得て行動する丁寧な表現として「～(さ)せていただきます」がよく使われている(これを丁寧な表現と認めるかどうかは場面によって、個人差がある)が、これにも「～(さ)していただきます」が堂々と併用されているのはその証と言えるであろう。年齢層にもよるが、ネイティブ・インフォーマントである日本人の感覚では、「させて」が正確、規範的日本語であり、「さして」を崩れた表現と感じる人が多いのではないかと思われるが、それにもかかわらず

「さして」が依然使われ続けるであろうことはほとんどの人が否定できないであろう。

では、なぜ日本人は規範的であると感じる、感じないにかかわらず、一つの使役行為を表現するのに複数の形態を認め、使用するのだろうか。使役の意を表現するに当たって、母語話者としての日本語の感覚はどのように働いているのだろうか。

使役表現に関する、このような混乱は如何にして発生するのか。現代日本語は変化しているのか。日本語の使役表現の音韻形態を文法面から観察し、混乱の原因を考察する。

## 2. 使役表現——問題の所在——

日常の会話の中で、以下のような表現を耳にする、または自身で使用した経験はないであろうか。

- (1) a. その手紙、彼には読ませない。  
b. その手紙、彼には読まさない。
- (2) a. 今は泣きたいだけ、泣かせてやろう。  
b. 今は泣きたいだけ、泣かしてやろう。
- (3) a. その本、読ませてください。  
b. その本、読ましてください。  
c. その本、読まさせて(読まさして)ください。
- (4) a. その写真、見せてください。  
b. その写真、見させてください。  
c. その写真、見してください。
- (5) a. 驚かせてごめんね。  
b. 驚かしてごめんね。
- (6) a. わたしも試合に出(だ)させてください。  
b. わたしも試合に出(で)させてください。  
c. わたしも試合に出(だ)してください。  
d. わたしも試合に出(で)さしてください。
- (7) a. 電車で帰る人には、駅でおりさせよう。  
b. 電車で帰る人は、駅でおろそう。
- (8) a. 学生を立たせる。  
b. 学生に立たせる。  
c. 学生を立たす。

(9) a. レポートを書かせれば、どのくらい理解しているか、わかる。

b. レポートを書かせば、どのくらい理解しているか、わかる。

(1)~(9)の表現は、意識して読めば微妙な違いがあるように感じられるが、使役の行為——誰かが命令・許可などによって他の誰かにある行動を実現するように仕向ける——に関する限り、意味上の違いは無い。にもかかわらず、形態が異なるのは(8) a・bの格助詞の違いを除いて)使役を意味する動詞の活用が、具体的には下一段と五段の活用が異なるからである。

このことからわかるように、使役を表現する動詞には主として2つの形態がある。

(A) 動詞未然形+せる・させる(口語助動詞)、す・さす(文語助動詞)<sup>1)</sup>

(B) 使役の意を持つ他動詞

(A)の、動詞に助動詞を付加する表現では使役助動詞「せる、させる」の活用により下一段活用(文語「す、さす」は下二段活用)となる。(B)の他動詞を用いる使役表現では、その他動詞の多くが語尾「〜す」で終わる五段活用動詞、一部が上一段または下一段活用である<sup>2)</sup>。上述の例文では、(1)~(9)aの全てと(4)(6)(8)bは下一段活用、その他のbと(4)(8)c及び(6)c dは五段活用を用いたため、活用の形態が異なるのである。

助動詞としての活用は口語は下一段活用、文語は下二段活用であり、他動詞ではサ行五段活用が多い。

	口語— 「する」	文語— 「す」	サ行五段活用— 「書かす」
・未然形—	させない	させず	書かさない
・連用形—	させて/ させます	させて	書かして/ 書かします
・終止形—	させる	さす	書かす
・連体形—	させる	さする	書かす
・已然形—	させれば	さすれば	書かせば
・命令形—	させろ/ させよ	させよ	書かせ

活用の形態が変わるだけで表現の意味が全く同じであるのなら、規範的かどうかさえ気にしなければ、下一段、五段のどちらに活用しようとコミュニケーションは支障なく成立する。では、(A)と(B)の表現、言い換えれば、助動詞(下一段活用(文語

下二段活用))を用いる使役表現と他動詞(五段活用)によるものでは意味上、まったく同一と考えてよいのであろうか。

青木(1976)は、対立する自動詞・他動詞のペアについて、「自動詞+(さ)せる」の使役表現と他動詞を比較、対照させ、次のような違いを指摘している。

例：一人だけ残る(自動詞) 一人だけ残す(他動詞) 一人だけ残らせる(自動詞+せる)  
財産が残る(自動詞) 財産を残す(他動詞) 財産を残らせる(\*自動詞+せる)

「自動詞+せる」型では、行為の実現において、させ手(主体)のみならず、させられ手(客体)の能力・意志、つまり客体の自主性が必要不可欠であるのに対して、他動詞表現では客体の意志・主体性が感じられず、まったく没却している。このことから、(A)使役表現(使役助動詞を用いるもの)と(B)他動詞表現の基本的な違いも含めて次のように定義し、使役の意味を強制、許可助成、放任に分類する。

「使役とは、ある者が他者に対して、他者自らの意志において或いは主体性を持ってその動作を行うようにしむけること(この場合の他者とは有情物に限らない。非情物の持つ動作実現能力・本性は、有情物の意志・主体性と同様にみなし得る)」(用例、定義とも青木(1976))

森田(1988,2002)は、青木と同じく、全体的に他動詞表現では客体(させられ手)に非情物が多く、主体(させ手)の一方的意志の作用と感じられるのに対して、「自動詞+せる」の使役表現では主体、客体双方の意志が尊重される傾向が強いとす。が、日本語文法では必ずしも自動詞・他動詞がペアで存在するわけではなく、使役表現も他動性の一つの表現であり(自動詞が対応他動詞を欠く場合、他動詞相当として自動詞の使役形がそれに充てられることなど)、使役の意は主体と客体の相互の関わり、文脈によって表現されるとしている。

「「自動詞/他動詞/動詞+使役」の3種の文型の違いはあくまで形式面での相違であって、それぞれの文型から来る“文の表現的意味”に画然とした差が本来備わっているわけではない。(中略)お互いに重なり合う部分のある類義の表現で“形式上のゆれ”を起こしている」(森田(2002))

森田(2002)では、意味分類を因果関係、結果(無作為)、責任・手柄、誘発(不随意)、放置(たま

ま), 放任 (させておく), 許容, 指令, 使役 (やらせ), 他動性 (作為) に 10 分類している。

以上のように, 使役表現 (助動詞によるもの) と他動詞表現は基本的には区別されるが, 形態的にも意味的にも非常に近い性質を有しており, 全ての表現について正確に区別することは難しく, 不可能であると考えられる。

岩淵 (1964), 青木 (1976), 森田 (2002) は, 現在の日本語の中で使用されている語尾「(さ)せる」の動詞が全て使役表現となるわけではなく (語尾「せる」の自動詞も存在する), かつ辞書に他動詞と記載されているもの (語尾「～せる」形と「～す」形の両方, また他動詞「～す」形から発生した「～せる」形, 使役「～せる」形から発生した他動詞「～す」形もある) の中にも明らかに使役そのものであるものが存在することを指摘している。また活用形についても岩淵 (1964), 吉田 (1977), 青木 (1980) では, 使役の口語表現において下一段と五段の活用のユレが頻繁に見られる (特に連用形の場合, 「(さ)せて」と「(さ)して」) ことから, 下一段と五段の両活用を容認すべきかどうか検討を示唆している。

しかしながら, 日本語文法の原則として, 助動詞による使役表現と他動詞表現とで意味上の違いが存在し, かつ活用が異なるのであれば, 意味の違いが異なる活用形態によって表されていることが考えられる。とすれば, 活用形態の違いは日本語コミュニケーションの中で, 話者の意図を正確に表現し分ける機能を有しているのである。では, 助動詞表現と他動詞表現では, その形態, 意味についてどのような違いがあるのか, また実際の表現においてどのような混乱が見られるのか。以下, 考察を進めていく。

### 3. 使役表現——活用の形態とその意味

最初に, 使役助動詞と使役の意を有する他動詞の, それぞれについてその活用, 及び意味を見る。

#### 3-1. 使役助動詞「(さ)せる」の活用

青木 (1976) にも指摘されるように, 使役の意は自主性を持つ (とされる) 主体と客体の, 互いの関わりから生じるものであり, 非意志の状態表現, または客体に自主性の感じられない表現の動詞に使役形は無理がある。

例: 非意志的状态動詞: ある→あらせる (\*), できる→できさせる (\*), 要る→要らせる (\*), 読める→読めさせる (\*)

客体に自主性の感じられない表現:

動く→机を動かせる (\* 可能の意, または「机を動かす (他動詞)」は可)  
こわれる→机をこわれさせる (\* 「机をこわす (他動詞)」は可)

使役助動詞を用いる場合, その助動詞は口語では「せる, させる」(文語では「す, さす」) を動詞の未然形に付加する。「させる」と「せる」の使用は前の動詞の活用によって決まる。( ) 内は文語。

#### ①五段活用動詞未然形+せる (口語) (す)

例: 聞く→聞かせる (聞かす)

#### ②その他の活用動詞 (上一段, 下一段, カ行変格, サ行変格活用) の未然形+させる (口語) (さす)

例: 見る→見させる (見さす), 流れる→流れさせる (流れさす), 来る→来(こ)させる (来(こ)さす), ※する→ささせる (さす)

①②を正確に区別し, 記憶するのは一見煩雑で記憶の労力を必要としそうであるが, 母語話者である者にとってはさほど困難ではない。①②に共通する形態として, 五段活用動詞未然形は全て/a/で終わり, それ以外の動詞の未然形は/i, e, o/で終わるが, 五段活用以外の動詞には/—sa—/をつけることによってその語尾の形態は/saseru/ (文語/sasu/) となる。結局, 元の活用は異なっているが, 全ての動詞の使役形語尾は/—aseru/ (文語/—asu/) となる。母語話者はこの音韻法則というか, 感覚—「ア段+せる」—を母語習得の段階で自然に身につけているのである。サ行変格活用動詞は唯一の例外となる。ルールに従えば, 口語「せさせる」, 文語「せさす」となるはずであるが, 平安時代より「さす」(現代口語では「させる」) がその使役形となり, 定着している。また文語形は終止形語尾「～す」で終わり, 次に述べる他動詞終止形と同形になるが, 活用は下二段活用であり, 五段ではない。意味については前述の青木 (1976) に拠る。

#### 3-2. 使役の意の他動詞の活用とその意味

使役の意を有する他動詞は数多い。その形態は一

様ではないが、本稿では助動詞表現と活用形態が紛らわしい、音韻の混乱について考えるものであり、ここでは語尾／— aseru／、／— asu／を持つ他動詞について観る。辞書<sup>3)</sup>に記載のある語尾／— aseru／、／— asu／の他動詞は以下の通りである。自動詞、複合動詞は除く。

まず／— aseru／の語尾を有する他動詞から。全て下一段活用の動詞である。数は語尾／— asu／形の他動詞に比べて少ないが、その多くが／— asu／形の他動詞を併せ持つ。(※は語尾／— asu／と両形を持つもの) またア段に付かないが、語尾／— aseru／となる他動詞として「浴びせる、着せる、似せる、乗せる、見せる (全て下一段活用)」などがある。

□語尾／— aseru／の他動詞：

※飽かせる、※合(会、逢、遭)わせる、言わせる、うるませる、※噛ませる、※聞かせる、※利かせる、※軋ませる、※くゆらせる、※食らわせる、※食わせる、※狂わせる、※こじらせる、※させる、騒がせる、忍ばせる、※知らせる、※済ませる、※せかせる、添わせる、ちぢらせる、ちらつかせる、つかませる、※泣かせる、※握らせる、※寝かせる、覗かせる、※走らせる、※流行らせる、ひっこませる、※任せる、※紛らせる、※むかつかせる、※娶わせる、※持たせる、※わずらわせる、笑わせる(五十音順)

これらの「～せる」他動詞の元の動詞(原動詞)には有情物を主体(主語)とする動詞が多い。

例：飽きる(原動詞)→飽かせる、会う→会わせる、言う→言わせる、噛む→噛ませる、聞く→聞かせる、騒ぐ→騒がせる、泣く→泣かせる、握る→握らせる、寝る→寝かせる、走る→走らせる等

また厳密な意味での有情物主体ではないが、行為実現に人間の感情、意志が感じられる表現、及び擬似有情物とも言うべき、人に擬せられるものもある。

例：眼を潤ませる、気を利かせる(人間の心理表現)、ドアを軋ませる、足音を忍ばせる、紫煙をくゆらせる、風邪をこじらせる、パステル・カラーを流行らせる(擬似有情物が主体となる表現)等

青木(1976)では、一般的に原動詞の意志性が使

役を表現する鍵になっているとし、以下のように述べている。

「(辞書に他動詞と記載されるものについて)もとなる自動詞(原動詞)に意志的性格が濃厚である場合には、一般に使役として受け取られ、原自動詞に全く意志性が見られない場合には、「す」型は勿論「せる」型でも殆ど問題なく他動詞と見なされる」(( )内一筆者注)

森田(2002)では、「他動詞「～す」形と使役の「～せる」形とは時に表現的意味が等しくなり、どちらを利用しても大差ない場合が生ずる」として他動詞「～す」形(五段活用)から「～せる」形(下一段活用)になったもの、使役「～せる」形から五段化して他動詞「～す」形となったものをあげている<sup>4)</sup>。

他動詞／— aseru／は、そのほとんどが一般的、日常的によく使用され、多くのものが慣用表現としての用法を持つ。そのため、母語話者の感覚では「動詞+せる(使役助動詞)」の複合形というより、むしろ一語として受け入れられており、そのため辞書に他動詞の項目として記載されるものと思われる。しかし、一語化し、「～せる」形(下一段活用)と「～す」形(五段活用)の両形を持つものであっても、その全てが意味上も全く同一になるわけではない。

例1: a. 弟をいじめて泣かせてやろう／泣かしてやろう

b. (今、弟は悲しいのだから)弟に泣きたいだけ泣かせてやろう／泣かしてやろう(?)

例2: a. 子供たちを早く寝かせなさい／寝かしなさい

b. (今日は休みだから)ゆっくり寝かせてやりなさい／寝かしてやりなさい(?)

例3: あなたまでわずらわせて／わずらわしてごめんなさい

最後の例3「わずらわせる(わずらわす)」は、相手(客体)の意向は気にしながらも、相手に迷惑をかけざるを得ない状況が発生し、結果的に主体の都合で相手に面倒をかけてしまい、申し訳ないと主体が感じている状況を表現する。この場合、客体は意志性を持ちながらも、その意思が尊重されていない、顧みられておらず、主体の一方的な作用の結果であると言える。この例では、下一段活用でも五段活用でも違和感は感じられない。

一方、例1・2では、aの場合、主体の一方的な意志によって、「弟が泣く」「子供が寝る」という事態が実現するのに対して、bでは、相手の様子・相手を取り巻く状況から、むしろ相手の意志、感情を尊重して事態実現を許可し、助けてやろうという主体の思いやりの要素が大きい。言い換えれば、相手の要望を汲み取って相手の実現したい状況を実現させようという相手尊重が表現されている。特に、(原動詞が自動詞の場合)させられ手(客体)の格助詞に「を」ではなく、「に」を用いるとこの違いは一層明瞭になる。

例4: 監督は練習として部員を走らせる／走らす  
親は子供たちに自然の中で自由に走らせる  
／走らす(?)

他動詞として辞書に記載されるほど助動詞付加の感覚が薄れ、一語化している「～せる」形でも、周囲との関係、文脈次第では「～す」形との違いが感じられる。その場合、「～せる」形のほうが「～す」形より客体自身の自由な意志、自主性がより感じられ、許可、放任の意図が表現されやすいと考えられる。

次に語尾／－asu／の他動詞について述べる。

語尾／－asu／の他動詞は数量が多く、辞書に記載されているものから一般的、日常的によく使用される語を選択した。語例は以下の通り。

ほとんどは五段活用であるが、ごく一部が下一段活用(※付加のもの)である。

□語尾／－asu／の他動詞

明かす、飽かす、余す、甘やかす、あやす、荒らす、あらわす(表, 現, 顕, 著), あわす(会, 合, 遭), いかす(生, 活), 急がす, 痛(傷)ます, 癒す, 怒らす, うっちゃらかす, 浮かす, 動かす, うごめかす, ※打たす, 遅らす, 驚かす, おびやかす, おひゃらかす, 泳がす, 欠かす, 輝かす, かざす, かどわかす, 絡ます, 交わす, 通わす, かどわかす, からす(枯, 嘎, 涸), 聞かす, 利かす, 軋ます, 切らす, 腐らす, 下す, 曇らす, くゆらす, 暗ます, 狂わす, 食らわす, 食わす, 汚す, けなす, こかす(転倒), 焦がす, こなす, ごまかす, 転がす, 転ばす, 肥やす, こじらす, 壊す, 探す, 覚ます, 冷ます, 晒す, 死なす, 知らす, じらす, じゃらす, すかす, すっぱかす, 済ます, 澄(清)ます, ずらす, せかす,

そそのかす, そびやかす, 逸らす, 反らす, 耕す, 足す, 出す, 正(糾)す, 質す, 漂わす, 戦わす, 騙す, 絶やす, 垂らす, 縮らす, 茶化す, 散らかす, 散らす, 費やす, 照らす, ときめかす, 溶かす, どかす, 閉ざす, とろかす, 泣かす, 流す, 成(生)す, 慣らす, 鳴らす, なびかす, 悩ます, 習(倣)わす, におわす, 逃がす, 握らす, 賑わす, にごらす, 鈍らす, 濡らす, 寝かす, 逃がす, 伸ばす, 飲ます, はかす, 化かす, 剥がす, はぐらかす, 励ます, 走らす, 話す, 離(放)す, 生やす, 囁す, 流行らす, 晴らす, 腫らす, 引かす, 光らす, ひけらかす, 響かす, ひやかす, 冷やす, ひるます, 吹かす, 膨らます, 増やす, ふやかす, 降らす, 震わす, へこます, 減らす, ほかす, 暈す, ほころばす, ※任す, 負かす, まぎらす, 紛らわす, 惑わす, 迷わす, 回す, 見せびらかす, 満たす, むかつかす, 蒸らす, めあわす, めぐらす(巡, 回, 廻), 持たす, もたらす, 燃やす, 漏らす, 揺るがす, 揺らす, 酔わす, 沸かす, 渡す, 煩わす, (五十音順)

語尾／－asu／の他動詞は、語尾／－asu／を／－aseru／に入れ替えると、使役を表すものと可能の意になるものが存在する。(内は、元になる原動詞)

□使役表現になる他動詞:

急がす(急ぐ)→急がせる, 聞かす(聞く)→聞かせる, 転ばす(転ぶ)→転ばせる, 死なす(死ぬ)→死なせる, 知らす(知る)→知らせる, 戦わす(戦う)→戦わせる, ときめかす(ときめく)→ときめかせる, 悩ます(悩む)→悩ませる, むかつかす(むかつく)→むかつかせる等

□可能表現になる他動詞:

動かす(動く)→動かせる, 枯らす(枯れる)→枯らせる, 乾かす(乾く)→乾かせる, こわす(こわれる)→こわせる, 散らす(散る)→散らせる, 溶かす(溶ける)→溶かせる, 流す(流れる)→流せる, 鳴らす(鳴る)→鳴らせる, 剥がす(剥げる)→剥せる, 減らす(減る)→減らせる等

青木(1976)が指摘するように、この使役表現と可能表現との分かれ目の鍵も、元の原動詞の主体

(他動詞表現では客体となる)の性質にあると思われる。原(自)動詞の主体が有情物で、かつ行為の実現に主体の意志が大きく関わるものであれば、対応する他動詞表現にもそのことが反映する。

例：友達が急ぐ→友達を急がす／急がせる、友達がその情報を知る→友達に情報を知らす／知らせる等

一方、原(自)動詞の主体が意志を持たない、他に影響、作用されるだけのものであれば、他動詞表現においても自らの力を持たない、非情物の客体となる。

例：植物が枯れる→植物を枯らす、洗濯物が乾く→洗濯物を乾かす、体重が減る→体重を減らす等

また「泳がす、切らす」等、原(自)動詞とは異なる意味を持つものもあるが、これは慣用表現として定着しているためであろう。

以上のことから、他動詞「～せる」形と「～す」形について次のような傾向が存在する。

活用の形態としては、「～せる」形は助動詞によるもの、他動詞とも下一段活用であり、他動詞「～す」形は五段活用がほとんどである。ただし、他動詞「～せる」を持たない「～す」形だけの他動詞であっても、原動詞に使役助動詞を付けて「動詞+せる」の形態が存在するが、その活用は下一段であって五段ではないことに注意されたい。

例：驚く(原自動詞)一驚かす(他動詞)一驚かせる(自動詞+助動詞)

迷う(原自動詞)一迷わす(他動詞)一迷わせる(自動詞+助動詞)

意味上の違いとしては、使役の主体と客体の関わりの中で客体の意志が活かされているかどうかのポイントである。使役表現では、客体(させられ手)の意志の有無のみならず、その意志が尊重されているかどうか、客体自身の自主性が認められるかどうかが重要である。この点から判断すれば、本来の使役としての表現力を発揮するのは「～せる」形であり、「～す」形では主体の一方的意志の作用が濃く感じられる。

#### 4. 使役表現——音韻の混乱、及びその原因

日常会話の中で使役表現について以下のようなユレ(混乱)が観察される。全体的に、下一段活用の

五段化が目につく。

□連体・終止形—「自動詞+せる」vs 他動詞、及び五段活用 vs その他の活用

例①：a. ゲームが始まる(自動詞)

b. ゲームを始める(他動詞)

c. ゲームを始ませる(自動詞+せる)

例②：a. 料理を食べる(他動詞)

b. 料理を食べさせる(他動詞+せる)

c. 料理を食べらせる(\*)

例③：a. 一年生が試合に出(で)る(自動詞)

b. 一年生を試合に出(だ)す(他動詞)

c. 一年生を／に試合に出(で)させる(自動詞+せる)

d. 一年生を試合に出(だ)させる(他動詞+せる)

例④：a. ゆかたを着る(他動詞)

b. ゆかたを着せる(他動詞)

c. ゆかたを着させる(他動詞「着る」+させる)

例①は、コンピュータ・ゲームを開始する状況である。a. bでは、スイッチを押せばゲームが自動的に始まる(a)と、ゲームを行う人間主導でゲームを始める(b)感覚の違いが感じられる。「始ませる」(c)は「始まる(五段活用)」の未然形「始まらない」と使役助動詞「せる」の形で活用形として間違いはない。しかしながら、奇異な感じがする(少なくとも筆者にとって)のは、動詞の客体が「ゲーム」という自主性を持たないものでありながら、使役形が使われていることにある。今のコンピュータ・ゲームは進化していて、ゲーム展開のスピードも速く、人間がゲームで遊ぶのか(この場合「ゲーム」は遊ぶ手段)、ゲームと人間が対峙、競争する、対等な存在と感じられるのか、はっきりしないのかもしれない。とすれば、後者(人間とゲームの競争)の場合、スイッチを押せば次から次へと画面が変わり、ゲームをする人間の意志に関わりなくゲームが展開するという状況を表すにはふさわしい表現と言えるのかもしれない。

かつて日本語文法では他動性動詞の主語には有情者が立つのが基本で、非情物が立つようになったのは明治以来の翻訳の影響と言われている。しかし現実には非情の他動性表現は普通に使用されており、現代の文化・社会では、これからますます増えていくであろう。その意味では例①—cのような表現は

今後も多用されるのかもしれない。

例②—c「食べさせる」は「始ませる」(b)と同様、語尾「～らせる」を持ち、一見して使役形であるかのように錯覚するかもしれない。しかし「食べる」(a)は下一段活用の動詞であって、その使役形は「食べさせる」(b)が正しい形である。方言の影響もあるかもしれないが、最近、五段以外の活用動詞「降りる(上一段活用)」「(電話を)かける(下一段活用)」「来る(カ行変格活用)」等を、五段化して「バスを降りらせる(降りらす)」、「電話をかけらせる(かけらす)」、「来らせる(来らす)」などと使用しているのを耳にすることがある。

例③は自動詞「出る」(a. 下一段活用)と他動詞「出す」(b. 五段活用)、及びそれぞれの使役形(c. d.)が使用されている。この内、「出(で)させる」(c)については活用は正しいが、監督(上位者)の判断が決め手となる、このような場合、あまり使われない形態であると思われる。実際には「出す」(b)か「出場を許可する」「出(だ)してやる」のほうが普通であろう。

「出(だ)させる」(d)は他動詞「出す」(五段活用)未然形に使役助動詞「せる」を付加したものであり、その内容は「Aが(命令・許可などにより)BにCを出すように仕向ける」という二重の使役性を表現することになる。この場合「出す」という行為を実現するのはBとなる。設定を変えて例をあげると、

例：(私たちはお金がないが)彼は金持ちだから、(私たち(A)は)彼(B)に旅行の費用(C)を出(だ)させよう——「彼が費用を出す(金を払う)」ように仕向ける

従って、例③を活用形態の意味に沿って解釈すると以下のようになる。

- 例③: a. 一年生が試合に出(で)る(自動詞)——一年生の意志・実力で、または成り行きで一年生が出場するという事実を表現する。
- b. 一年生を試合に出(だ)す(他動詞)——監督または上位者の判断、命令で一年生が出場する。
- c. 一年生を／に試合に出(で)させる(自動詞+せる)——監督または上位者の判断、命令、(格助詞「に」の場合は一年生の頼みを許可)により、一年生が試合に出場する。他動詞表現(b)より一年生自身

の自主性が感じられる。

- d. 一年生を試合に出(だ)させる(他動詞+せる)——監督がチームの二年生、三年生に命令(説得して)一年生が試合に出場するよう、仕向ける。一年生の直接の希望によって監督が出場を許可する意味ではない。

例②は動詞の活用形の混乱、例③は活用形態の表す意味の混乱であるが、さらに活用形、及び活用形態の表す意味の両方において紛らわしいものもある。

- 例④: a. ゆかたを着る(他動詞)  
b. ゆかたを着せる(他動詞)  
c. ゆかたを着させる(他動詞「着る」+させる)

例④ a. bは「(自分自身が)着る(上一段動詞)」と「(相手に)着せる(下一段動詞)」の、どちらも歴とした他動詞であり、「着せる」は主体の意志で相手が着るように仕向ける、または主体が客体(相手)の着付けをするという意味でもある。それに対して「着させる」(d)は「着る+させる」の助動詞による使役表現(下一段活用)であり、強制—「相手が嫌がっているのに「着る」ことを命令、相手が(しぶしぶにしろ)それに従う」にせよ、または許可——「相手が着たいというのでそれを許す」にせよ、「着る」という行為について客体の意志をある程度認める表現といってよいであろう。しかし実際に会話の中では、他動詞と使役助動詞の違いはほとんど注意されておらず、どちらの意味で使われているのか、曖昧な場合が多いようである。現代では、むしろ「着せる」「着させる」(下一段活用)の五段化「着らせる」のほうが問題であるかもしれない。

□連用形—／— sete / vs / — site /

- 例⑤: a. やらせてやろう。  
b. やらしてやろう。  
c. 本人がやりたいといっているのだから、やらせて／やらしてやろう。  
d. この仕事は私にやらせていただけませんか。

例⑥: a. その写真、見せて  
b. その写真、見して  
c. その写真、私にも見させて／見さして  
連用形はテ形と丁寧体「～ます」の形であるが、活用の混乱が最も多いのがテ形である。「～ます」形

は丁寧、かつ文末で使用されるせいか、テ形ほど混乱は多くないように思われる。

例⑤の動詞「やる」(「する」の意)の使役形は「やらせる」(a. 下二段活用)であり、他動詞は「やらす」(b. 五段活用)である。(c)は本人がやりたいと言明しており(本人の積極的意志)、それを認めるのであるなら「やらせて」のほうがより適切と考えられる。

最初にも述べたが、最近よく耳にする「～(さ)せていただきます」という表現は、ほとんどの場合、自分自身がある行動を起こすに当たって、話の相手の了承を得るといった状況で使われている。とすれば、させられ手(自分自身)の自主性がまず先にあっての表現であり、許可を求める表現としてこの場合は「～(さ)して」より、「～(さ)せて」を使用するほうがより丁寧と感じられるのではないだろうか。しかしこの形が頻繁に使われるようになると次のような問題も発生する。「やらさせていただけますか」(d)は、他動詞「やらす」未然形に使役助動詞「せる」を付加した形態であり、二重の使役性を表現することになる。この場合「私」自身がその仕事をしたいのであるから、「やらせていただけますか」でよいのである。にもかかわらず、このような形態が見られる原因として、筆者は以下のように推察する。丁寧な表現として「させていただきます」という形態が意識、記憶され、そのため「相手が自分にその仕事をやらす」という内容がそのまま「させていただきます」の形に挿入されたものか、または「やらす(させ手である相手の意志尊重)」に丁寧表現「させていただきます」を付加することによって二重に丁寧さを表現しようとしたことが考えられる。どちらにせよ、不自然な形では丁寧さを表現することは不可能であろう。

例⑥「見せる」(a)は、例④「着せる」や他に「乗せる、似せる」と同じく他動詞(下二段活用)であり、主体(させ手)の一方的意志作用を表現する。その形態は／－iseru／で、使役表現の語尾／－aseru／とは、「せる」の前がイ段とア段で異なり、本来、他動詞「～す」形とは入れ替わらないものである。しかし、これらの他動詞のテ形では終止形同様、五段活用化が起こり(b)、活用形態の意味においても使役表現と他動詞表現、五段活用と下二段活用の差異が感じられないものが見られる(c)。

□未然形／－senai／vs／－sanai／

例⑦:a. そんなこと、言わせない

b. そんなこと、言わさない

例⑧:a. 子供を甘やかさせない(\*)

b. 子供を甘やかさない

未然形は下二段活用／－senai／、五段活用／－sanai／であり、動詞「言う」の使役形「言わせる」(下二段活用)未然形は「言わせない」(a)、他動詞「言わす」(五段活用)の未然形は「言わさない」(b)となる。この場合、動詞「言う」は有情の客体を持ち、「言わせる」「言わす」どちらを用いても話者の、行為実現阻止の意志表現は同じである。しかし同じ他動詞「～す」形の中にも、客体が有情であっても、その行為は主体の一方的意志作用でしかなく、その「～せる」形が使役とはなりえないものが存在する(前述)。例⑧「甘やかす」(五段活用)もその一つであり、その場合「甘やかさせない」(a)は可能否定形となる。

□已然形／－seba／vs／－sereba／

例⑨:a. 彼に任せば／任せれば、全てがうまくいくよ。

b. 急がせば／急がせれば、何とか間に合うよ。

例⑩:a. 君が彼を励ませば、彼もやる気を出すよ。

b. 君が彼を励ませれば、彼もやる気を出すよ(\*)

已然形「～ば」は、五段活用動詞／－seba／、下二段活動詞／－sereba／となる。例⑨の使役形「任せる」他動詞「任す」(a)は(使役形、他動詞とも)下二段活用であるが、五段、下二段のどちらの形態でも意味の違いは無い。客体「彼」の意志・自主性が感じられるからであろう。例⑨b「急ぐ」の場合も、使役形「急がせる」、他動詞「急がす」とも行動実現に客体の意志性が感じられ、どちらの形態でも表現の意味は変わらない。しかし例⑩「励ます」(a. 五段活用 原動詞「励む」)は主体の一方的意志作用と考えられ、未然形の場合同様、「励ませる」は可能を表現する。すなわち、使役性の薄い他動詞「～す」では使役形「～せる」の活用形での使役表現は成立しないと考えられる。

## 5. 結論

岩淵(1964)は、「～す」の語源について「奈良

時代においては、他動を表すのに、四段と下二段の場合があったが、平安時代になると、更に下二段に活用する使役の「す・さす」が加わり、「す」について言うと、(他動、使役、尊敬の意の)五種類もの「す」が生じたのである」と述べ、他動と使役が形態、また意味の面からも、元は一つであったことを指摘している。また中世から近世にかけて既に使役の「～す」(下二段活用)の四段化が見られ、その音韻形態の混乱は古く、それだけに深く日本語の中に浸透していると言える。

現代においても、辞書に他動詞と記載されているからといってそれだけで助動詞による表現と別したり、逆に他動詞の記載が無いから他動詞の用法は文法として間違いだと決め付けることは出来ない。母語話者はネイティブ・スピーカーとしての自身の感覚によって表現を生成し得るのである。

しかし一方で、言語はその歴史の中で、その形態、表現の意味・機能において全体の体系を築いてきたものであって、日本語も例外ではない。使役表現「～せる」形と他動詞「～す」形の意味上の違いを知ることは、きめ細かい日本語コミュニケーションを行うにおいて役に立つものであり、表現力を豊かにする。また活用の形態において全体的に一段動詞の五段化、及び活用形の混乱が見られるが、これが甚だしく進行すれば日本語の体系の崩れにつながる恐れがある。簡便化を求める時代の趨勢もあるが、正確な日本語を使いこなせるよう期待したい。

(注)

1. 使役動詞語尾の文語「す、さす」から現代口語「せる、させる」への変化発生は中世、鎌倉室町時代に遡る。動詞の連体形が終止形を兼ねるものとなり、使役の助動詞も終止形「す、さす」から「する、さする」へ、さらに現代に至って「せる、させる」へと変化した。そのため活用が下二段から下一段活用へと変化するが、江戸時代にはサ行四段(五段)動詞との近似性から四段活用での使用例が見られる。現在の日本語教育では使役表現は「せる、させる」で指導されている。
2. (A)と(B)の混乱は早くも室町時代には発生していたとみられる。このように紛らわしい複数の表現形態を持つにいたった歴史的経緯については岩淵

(1964)に詳しいのでここでは割愛する。

3. 『逆引き広辞苑 第五版対応』(1999 岩波書店)、『広辞苑 第三版』(新村出編 1983 岩波書店)による。
4. 森田(2002)では、「他動詞「～す」形と使役の「～せる」形とは時に表現的意味が等しくなり、どちらを使用しても大差ない場合が生ずる。それが引き金となって、他動詞なのに「～せる」形にまで拡大しようするようになった。また逆に、使役表現にもかかわらず、「～す」形で表すことがおこなわれるようになった」として、それぞれ以下の語群を掲げる。
  - ・他動詞「～す」→使役「～せる」の派生：  
浮かす→浮かせる、動かす、驚かす、輝かす、通わす、乾かす、くらます、空かす、済ます、澄ます、滑らす、漂わす、縮らす、散らす、照らす、轟かす、飛ばす、鳴らす、悩ます、匂わす、濁らす、はためかす、走らす、響かす、降らす、減らす、紛らす、惑わす、迷わす、めぐらす、漏らす、ゆるがす、湧かす
  - ・使役「～せる」→他動詞「～す」の派生  
開けさせる→開けさす、急がせる、入れさせる、言わせる、怒らせる、落とさせる、覚えさせる、書かせる、担がせる、絡ませる、困らせる、聞かせる、利かせる、食わせる、凍えさせる、来させる、騒がせる、死なせる、知らせる、調べさせる、信じさせる、滑り込ませる、尋ねさせる、戦わせる、食べさせる、作らせる、嫁がせる、弾ませる、働かせる、眺めさせる、飲ませる、震わせる、認めさせる、持たせる、やめさせる、喜ばせる、酔わせる

参考資料

- ・築島裕(1964)『国語学』(東京大学出版会)
- ・岩淵匡(1964)「行かせた」と「行かした」『口語文法講座3 ゆれている文法』(明治書院)
- ・青木怜子(1976)「使役——自動詞・他動詞との関わりにおいて——」『成蹊国文』第10号
- ・青木玲子(1980)「使役表現」『国語学大辞典』(東京堂出版)
- ・吉田金彦(1977)「使役の助動詞」『国語学研究事典』(明治書院)
- ・森田良行(1988)『基礎日本語辞典』(角川書店)
- ・森田良行(2002)『日本語文法の発想』(ひつじ書房)